

第2章 第三次推進計画の基本的方針

1 基本理念

○ 第二次推進計画期間における取組を踏まえた主な課題

市町村においては、ブックスタート事業等の実施により、子どもと絵本に親しむことの大切さや楽しさを多くの保護者に伝える取組が進みました。また、市町村における子ども読書活動推進計画の策定率（H20年度38%→H25年度67%）も大きく向上し、市町村立図書館における読み聞かせなどのボランティア活動も増加傾向（H20年度84%→H25年度96%）にあります。学校図書館においては、蔵書のデータベース化により、その利便性が高くなってきました。さらに、小・中学校においては、全校一斉読書の実施率が高い割合となっています。

このように、子どもの読書環境は、この第二次推進計画期間においてかなり整ってきたと言えます。

しかし、家庭や地域における課題として、子どもが小さい頃の読み聞かせが読書の習慣付けに有効であることから、ブックスタート等に取り組む市町村をさらに増加させる必要があることや、公立図書館から学校図書館への資料の貸出は進んでいるものの、公立図書館の司書による学校訪問など人的な連携の面では十分と言えない状況があることなどが挙げられます。また、学校等においては、資料、人的配置などの整備・充実を図ることなどにより、より多くの子どもが自主的に図書館に行くような魅力ある図書館づくりを推進することが必要です。

○ 愛知県調査を踏まえた子どもの読書活動の現状

今回の愛知県調査で、読書嫌い群の割合は小学生で14.8%、中学生で19.9%、高校生で26.0%と、学校段階が進むにつれて高くなり、また、不読率も、小学生で4.2%、中学生で7.6%、高校生で33.5%と、学校段階が進むにつれて高くなっています。

読書嫌い群の不読の理由としては、「本を読むのが面倒だったから（20.1%）」、「本を読むより他のことが楽しかったから（16.9%）」を挙げる割合が高くなっています。また、読書が嫌いな理由として、「本を読んでも楽しくないから

（22.2%）」、「本を読むことが大変だから（17.3%）」という理由を挙げており、特に高校生は本を読む習慣が身に付いていない（39.4%）ことが分かりました。

一方で、読書好き群の多くは、

読書が好き、読書が嫌いの割合

	好き	嫌い
小学生	85.2%	14.8%
中学生	80.1%	19.9%
高校生	74.0%	26.0%

読書の好き嫌い別の不読率

	愛知県			全国
	読書好き群	読書嫌い群	全体	
小学生	1.6%	20.0%	4.2%	4.5%
中学生	3.8%	25.9%	7.6%	16.4%
高校生	23.1%	63.6%	33.5%	53.2%

全国の数値：第58回学校読書調査（全国学校図書館協議会・毎日新聞社）

読書は楽しいと考えていることも分かりました。これらの子どもの不読率については、小・中学校では、極めて低くなっています。ところが、高校生では23.1%となっており、その不読の理由としては、部活動や勉強などで本を読む時間がなかったことを挙げる割合が高くなっています(60.9%)。

さらに、読書好き群は、読書嫌い群と比較して、小さい頃に家庭で本を読んでもらった経験のある子どもの割合が高くなっています。

小さい頃に家庭で本を読んでもらった経験のある子の割合

	読書好き群	読書嫌い群	全体
小学生	79.7%	55.9%	76.2%
中学生	74.2%	58.2%	71.1%
高校生	72.1%	61.2%	69.2%
全体	76.1%	58.3%	72.7%

○ 国の第三次基本計画における目標

文部科学省が平成25年5月に策定した第三次基本計画の中で、第二次基本計画期間における課題として、学校段階が進むにつれて読書離れが進む傾向にあることと、地域における取組の差が顕著であることなどが挙げられました。特に、不読率について今後10年間で半減させることなどが示されました。

○ 「愛知県子ども読書活動推進計画（第三次）」の基本理念

本県における第二次推進計画期間の課題や子どもの読書活動の現状、また、国の第三次基本計画における目標から、今後取り組むべき主な課題として、小さい頃の読み聞かせの充実、魅力ある学校図書館づくりの推進、高校生の不読率の改善などが挙げられます。

「小さい頃の読み聞かせ」の有無は、読書の好き嫌いとは相関関係があります。子どもが小さい頃に読み聞かせをしてもらうことにより、読書好きな子どもは増えていきます。そして、子どもが引き続き本に親しみ、自主的に学校図書館へ行くようになるには、「魅力ある学校図書館づくり」が必要です。子どもが高校生になっても読書好きで学校図書館に行くのであれば、読書の習慣が身に付き、「不読率」は下がっていくものと考えられます。

これから人格が形成されていく子どもにとって、読書が果たす役割はかけがえのないものです。従って、社会全体で子どもが読書に親しむきっかけづくりに積極的に取り組むことが求められます。そして、子ども自身が読書の楽しさを知り、読書を習慣化し、何よりも読書が好きになることが必要です。

そこで、本計画では、

～読書が好き！と言える子どもの育成を目指して～

を基本理念とします。

この基本理念を実現するために、3つの基本目標と9つの方策を立て、第二次推進計画期間中に整ってきた読書環境の活用と、読書に親しむきっかけづくりに重点を置いて取組を推進していきます。

2 3つの基本目標と9つの方策

基本理念を実現するために、3つの基本目標と9つの方策を定めます。

<基本目標1> 家庭、地域、学校等における取組の推進

子どもの自主的な読書活動を推進するためには、家庭、地域、学校等が、それぞれの役割を果たし、子どもが読書に親しむ機会の充実を図ることが必要です。

家庭、地域、学校等が果たすべき役割を明確にして、子どもの自主的な読書活動に向けた取組を推進します。

方策1 家庭における取組の推進

方策2 地域における取組の推進

方策3 学校等（幼稚園・保育所を含む）における取組の推進

<基本目標2> 普及啓発活動の推進

子どもの自主的な読書活動を推進するためには、子どもの読書活動の意義や重要性について、県民の間に広く理解と関心を深めることが必要です。

保護者、教員、図書館職員をはじめ、子どもを取り巻く全ての大人の理解と関心を高めるよう、普及啓発事業を積極的に進めます。

方策4 「子ども読書の日」を中心とした普及啓発の推進

方策5 子どもの読書活動に関する情報の収集・提供

方策6 優れた取組の奨励、優良な図書の実用普及

<基本目標3> 子どもが読書に親しむ機会を提供できる連携・協力体制の整備

子どもが自主的に本を読むようになるためには、発達段階に応じて本に親しむことができるような環境づくりを進めることが必要です。

また、家庭、地域、学校、図書館、民間団体等の子どもの読書活動に携わる機関・団体が緊密に連携し、相互に協力した取組を推進していくことが必要です。

子どもの読書活動を推進するために、乳幼児期から発達段階に応じて、子どもが興味を持ち、感動する本に出会えるような読書環境の整備・充実を進め、社会全体で読書に親しむ機会の提供に努めるとともに、関係機関・団体の連携・協力体制の整備を進めます。

方策7 家庭、地域、学校等相互の連携・協力の推進

方策8 図書館間等の連携・協力の推進

方策9 子ども読書活動推進体制の整備